



高知県立
文学館

高知県立文学館ニユース

藤並の森

Vol. 48



▲彦根城金亀児童公園内にある花の生涯記念碑（昭和39年10月25日建立）。
中央の四角い石を大老井伊直弼にみなし、左右の低い石を長野主膳と村山たか女、輝く砂は雪をあらわす。

リレー随筆

「大河の軌跡」を文学館企画展で

もとよし きし お
元吉 喜志男

大河ドラマ「龍馬伝」が好調なスタートを切っている。

龍馬のふるさとわが高知県でも、県をあげて「土佐・龍馬であい博」を展開している。

さて、大河ドラマも今回で四九回目と約半世紀近くの歳月を経たことになる。その源流点は大型時代劇という名称で産声を上げた昭和三八年、舟橋聖一作の第一回「花の生涯」に遡る。当時のテレビ界の実情を踏まえ、スケールの大きい健全娯楽作品を作ろうという関係者の燃えるような情熱やアメリカのテレビ事情を調査し当時の映画会社・五社協定の厚い壁を破るきっかけを作った佐田啓二さんの先見性、その後も幾多の困難な局面を漕ぎ抜いて今日に至っている。

文学と大河ドラマの関係も、時代の移り変わりを背景に興味深い軌跡を辿っている。第一作と第二作については、原作者と脚本家はともに小説家でスタートした。第三作では脚本家にテレビ作家を起用、第五作はそれまでの原作に忠実という枠が外され書き下ろしのオリジナル作品、第七作はテレビがカラー時

代に突入し、鎧の美しさを強調できる戦国ものが採択された。第十八作からは今ではむしろ主流となった感もある、小説家の原作ではなくオリジナル作品を脚本家に依頼するという手法もとられはじめた。

内容的にも、扱う時代やテーマについて、その時代々の価値観や世相、経済情勢などが踏まえられ、歴史の時間軸とその時代を重ねたりしながら絞り込まれている。例えば、人気時代劇の定番とも言うべき「忠臣蔵」は第二作「赤穂浪士」（大佛次郎）、第十三作「元禄太平記」（南條範夫）、第二〇作「峠の群像」（堺屋太一）、第三八作「元禄繚乱」（舟橋聖二）と計四回を数えるが、その時々の時代背景を踏まえ異なった切り口となっている。

また、第二九作からは、各回に因んだ名所旧跡を紹介する紀行コーナーもはじまり、大河ドラマ人気の定着とともに舞台となるゆかりの地は脚光を集め、地域振興の面からも注目されている。

四月からの当館での企画展では、こうした大河の軌跡を追ってみたい。

（高知県立文学館 館長）

展覧会
紹介
EXHIBITION

大河ドラマの軌跡と文学」展への誘い

平成22年
4月4日(日)

6月27日(日)
企画展示室

観覧料500円

大河ドラマの歴史は昭和三八年の第一回「花の生涯」まで遡りますが、今年の「龍馬伝」で第四九回目を数えます。そこで、高知ゆかりの作品の放映の年を記念して、約半世紀近くを迎える大河ドラマの軌跡と文学との関係などを、歴史・紀行・文学等といったキーワードを中心に辿り、「あの日あの時の自分史の心の風景」などとも重ねていただきながら愉しんでいただける企画展になればと考えています。

大河ドラマの軌跡を様々な角度から辿ってみたいと考えています。

●原作本を執筆した文学者たち

不透明な時代こそ歴史を学び、将来への指針探しが重要なことはよく言われます。

近年は歴史ブームといわれ、「歴史女」という言葉が使われだしたように歴史に関心を持つ人達の裾野が広がっています。

さて、この四月四日からの企画展「大河ドラマの軌跡と文学」でとりあげる作品は、圧倒的に歴史物が多く、昭和六二年の第二回「独眼竜政宗」から今年の第四九回「龍馬伝」までの直近の二五回は連続で幕末以前の物語となっています。

この展覧会では、歴史、ゆかりの地紀行、文学などの視点に着目しながら約半世紀近

大河ドラマの原作者は国民的作家として有名な方が沢山います。大河の源

流点とも言うべき第一回「花の生涯」の原作者・舟橋聖二、第二回「赤穂浪士」の大佛次郎、「太閤記」「武蔵」など四作品の原作者・吉川英治、本県にもゆかりの「竜馬がゆく」「功名が辻」など最多の六作品に関係した司馬遼太郎、本県出身で「義経」「篤姫」の二作品の原作者・宮尾登美子など文学者に視点を当てたコーナーでは、関係する記念館等のご協力を得て、原稿、創作資料、愛用品などの資料展示や写真パネル等で紹介します。



▶ 英治画「武蔵誕生地の図」一九三七年(昭和十二) 英治は一九三五年から「宮本武蔵」を連載していたが、その取材のため岡山県美作(現在の英田郡大原町)の宮本村を訪れたときに描いた。
／吉川英治記念館蔵

●作品の変遷と原作本の関係など

最近の大河では、脚本家がオリジナルの原作本を執筆しそれをもとにドラマをつくる手法は当たり前前のこととなっています。しかし、大河でこの手法がとられたのは、第十八回「獅子の時代」の山田太一や第十九回「おんな太閤記」の橋田壽賀子からです。それまでは、小説家の原作本を基に小説家や脚本家が脚本を手掛けてドラマをつくるとい



▲ 古戦場関ヶ原フェスティバルの様子／関ヶ原町役場提供

展覧会
紹介
Exhibition

「大河ドラマの軌跡と文学」展への誘い

それぞれのドラマの舞台となったゆかりの地は、観光や地域振興の面からも大変注目されています。第二回「い

●ゆかりの地・探訪

こうした、時代背景のなかでの作品の変遷も興味深く注目してみたいと思います。



▲大河ドラマ初の海外ロケ地となったマニラの聖アウグスチン教会／フィリピン政府観光省 提供

のちの青森県から第三回「琉球の風」の沖縄県まで国内はもとより、第十六回「黄金の日」ではじめての海外ロケ（フィリピン）となったケースまで沢山のゆかりの地があります。展覧会では、関係地のご協力を得て、写真パネルやナレーション付きのスライドなどで紀行風に演出したいと考えています。

会期は四月四日(日)から六月二十七日(日)までとなっています。皆様のお越しをお待ちしています。(学芸課長／元吉喜志男)

◆関連企画のご案内◆

■記念講演会「大河ドラマ誕生秘話」

元NHKエグゼクティブディレクター・演出家の大原誠氏による講演会です。

日時：平成22年4月18日(日)午後2時～

場所：高知県立文学館1Fホール

講師：大原 誠氏

参加料：要当日観覧券

定員：100名(要電話申込)

■よみがえる！大河ドラマゆかりの作品（ビデオ上映会）

※各日とも 時間：午後1時半 場所：高知県立文学館1Fホール

参加料：無料 定員：80名(電話または文学館受付にてお申し込みください)

- ◆「壬生義士伝」(2003年 松竹)約137分 … 4月29日(木・祝)
幕末の混乱期に、新撰組の隊士として純粋に生きた男の物語。原作：浅田次郎 監督：滝田洋二郎
- ◆「鞍馬天狗 角兵衛獅子」(1951年 松竹)約91分 … 5月4日(火・祝)
第2回大河ドラマ「赤穂浪士」の原作者・大佛次郎の代表作。 監督：大曾根辰夫
- ◆「大忠臣蔵」(1957年 松竹)155分 … 6月20日(日)
映画・演劇界の名スターの豪華競演で描かれた感動大作。総指揮：城戸四郎 監督：大曾根辰保

■文学散歩 …5月20日(木)、6月13日(日)

「龍馬伝」で注目を集める岩崎弥太郎生家など安芸市を中心にゆかりの地をバスで訪ねます。

集合場所：高知県立文学館1Fロビー 参加料：有料

定員：各日とも20名(電話または文学館受付にてお申し込みください)

その他、クロスワードパズルに挑戦するイベントや、大河トーク、朗読の会を催します。詳細は文学館までお問い合わせください。(TEL：088-822-0231)

平成22年
4月4日(日)

6月27日(日)
企画展示室

観覧料500円

☆展示解説

展覧会担当者による
展示解説を行います。

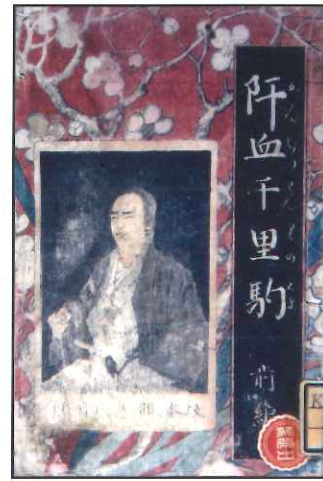
毎週土曜日と、
4月4日(日)、
6月27日(日)

各日とも午後1時半～
(約30分)

参加には当日観覧券
が必要です。

「龍馬を描いた文学者たち」展

2月1日(月)から、
3月21日(日)まで開催!



大正時代になると、「汗血千里駒」の影響を受けた白柳秀湖が『坂本龍馬』を民主主義の守護者と海軍の創設者という二つの要素を併せ持つヒーローとして描いています。また千頭清臣、飛鳥井雅道といった人々によって龍馬は紹介されています。

龍馬を描いた文学者たち 明治・大正・昭和・平成

幕末の志士「坂本龍馬」を最初に文壇で紹介したのは、高知県出身で自由民権家の論客としても知られる坂崎紫瀾でした。明治十六年のことです。坂本龍馬の生涯を千里を駆ける駿馬(『漢書 大宛国伝』)に喩え、「汗血千里駒」と名付けられたこの作品は、明治、大正時代を中心に読者を得ることとなります。紫瀾は、民権講談で培ったテクニクを發揮し、作品の中に社会改革のメッセージを織り込みながら、龍馬の活躍を鮮やかに描いています。

洋で行われている『会社』というものを日本で誕生せしめる最初になる」として「株」さえ買えば誰でも経営に参加できるという資本主義の先駆者として龍馬を描いています。

明治・大正と注目を浴びた坂本龍馬ですが、戦後、龍馬を描く歴史小説は激減しています。龍馬が再び取り上げられるのは、昭和三十一年、山岡荘八の『坂本龍馬』からと言えます。しかし、この作品は、龍馬が脱藩する直前で物語を終えており、海軍操練所を経て亀山社中、そして海援隊結成と

平成になると、史実に忠実な「龍馬」を津本陽が描いています。津本は、龍馬が

身につけた言語や航海術や国際法などを一種のスキルと位置付け、より有益なスキルを身につけた個人は、どのような組織でも成功できるという、個人主義型の龍馬を描いています。

いった海の男としての龍馬は描かれていません。帝国主義を称賛することになりかねないエピソードを書かないための苦肉の策だったのでしょうか。

昭和三十七年、社会に適応したヒーローとして、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』が紹介されます。司馬は「龍馬が設立を目指す艦隊(亀山社中)を私設艦隊とし、金や軍艦は『株』として諸藩から出させ、平時は通商として利潤を分配し、いざ外国が攻めてきたときは艦隊として活躍する。」さらに「西

このように、時代とともに、また作家の主張によって、龍馬の描かれ方は変化しています。今回の展覧会では、時代とともに龍馬がどのように描かれたか、龍馬の魅力その時代の資料とともにご紹介しました。

また、坂本龍馬研究者として「坂本龍馬全集」を刊行し、直木賞候補にも三度あがった高知県出身の作家・宮地佐一郎のコーナーを設け、「坂本龍馬全集 関係資料」や宮地さん収集の龍馬関連資料など、約百点をご紹介します。



平成二十二年二月二日(日)には、司馬遼太郎記念館館長の上村洋行氏に「司馬遼太郎と『竜馬がゆく』」と題しましてご講演いただきました。会場を埋め尽くした多くの司馬ファンは、上村氏の講演に熱心に耳を傾け、知られざる司馬遼太郎の魅力に思いを馳せていました。

今回の展覧会では、津本陽先生をはじめ多くの皆様にご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。

(学芸課/津田加須子)



土佐山内家宝物資料館との

連携展示を開催中！



▲文学館と山内家宝物資料館の両方の展示を紹介する懸垂幕がお出迎えます。



▲閲覧コーナーは2階口ピーに移りました。

全国から注目を浴びる今年の高知県には、多くの観光客が訪れています。

これにあわせて、文学と歴史という二つの視点で多くの方に楽しんでいただくとうと、文学館を会場に来年一月十日まで、土佐山内家宝物資料館と連携して展示を行っています。

この一年間は、土佐山内家宝物資料館は当館二階企画展示室を特別会場として四つの企画展を、文学館は常設展示室に特設コーナーを設けて五つの企画展を開催します。

「お城のふもとで出逢う歴史と文学」をキャッチコピーに、それぞれの特徴を活かした魅力ある展示になっています。文学作品と歴史資料をあわせてご覧いただける絶好の機会として、みなさまのお越しをお待ちしております。

なお、この期間の文学館常設展示は規模を縮小しますが、「宮尾文学の世界」では新資料を紹介するなど新しい内容で展示していますので、こちらもぜひ、ご期待ください。（学芸課／間城彩佳）

館長室から

「歴史とゆかりの地と文学と」 元吉 喜志男

今年元日の地元紙に「高知城東に新歴史館―県構想・山内家資料核に」の見出しが一面を飾った。この四月十日には県立歴史民俗資料館に長宗我部展示室が新設されリニューアルオープンする予定である。近年は歴史ブームであり、若い人も含め歴史と呼ばれる人達が全国のゆかりの地を巡る旅や地域振興への活用も活発である。

さて、高知でも「龍馬伝」に関連し、県を挙げて「土佐・龍馬であり博」を展開している。その関連で、この二月から高知県立文学館内に土佐山内家宝物資料館・特別会場が設けられた。この一年、相互に連携してお客さんに楽しんでいただける企画をと思っている。郷土の歴史や文化に誇りを持ち、次の世代に継承していくことの重要性は言うまでもない。その際、「文学」の役割も極めて大きいのではないかと思っている。龍馬を世に出したのは坂崎紫瀾が最初であり、世間一般でイメージされる龍馬像は司馬遼太郎の作品で作られたとも言える。いま、「大河ドラマの軌跡と文学」の準備をしているが、全国各地での歴史ブームを支えている要素として「文学」の果たしてきた役割の大きさを再認識している。

例えば、大河・第一作「花の生涯」の主人公・井伊直弼の彦根市では、この三月まで「井伊直弼と開国一五〇年祭」を行っている。地元で彼は「開国の父」と尊敬されているが、舟橋聖一の『花の生涯』抜きには語れない。忠臣蔵ゆかりの赤穂市で、毎年行われている「赤穂義士祭」は、昨年で二〇六回を数えた。ここでも大佛次郎の『赤穂浪士』の果たした役割の大きさを感ずる。この他にも、徳川家康の生誕地・岡崎市では毎年家康を偲ぶ「家康行列」等がある。十八年をかけた一万七千余枚にも及ぶ超大作・山岡莊八作の大ベストセラー『徳川家康』の存在感は圧倒的である。

歴史やゆかりの地の楽しみ方に文学をブレンドすることで、より深い味わいを醸し出せるのでは…と思われるこの頃である。

菲生野の往事寸景 — 浜本浩の「軍鶏」 — 猪野 睦

いまでは消えたが戦後もまだ、あちこちでシャモをたたかわせる光景があった。手塩にかけたシャモを連れだし、二坪ばかりの仕切りのなかで死闘を演じさせる。その血みどろに取まぐ連中が熱狂する。長宗我部元親も闘鶏に熱中した姿を宮地佐一郎も「闘鶏絵図」にかいているから、土佐のシャモ飼いは昔からの伝統でもあったろう。それに金も賭けた。浜本浩もこのシャモの話を「軍鶏」にかいた。

物部川上流の菲生にも県道がつき、乗合自動車も入り始めた頃というから大正も終りである。村には郵便局もでき、駐在所もでき、総検造りの大きな料亭も建ち、村から町へ変っていく時代である。いまの香北町美良布あたりである。

春先き麦とそら豆の緑が伸び始める頃、どこからか厚司を着た老人がやってくる。勝手に人の畠を仕切つて困い、賭けどりを始める。金をかける闘鶏である。村のならず者と若者を集め

賭に熱中させていく。

一昔前、村の資産家の次男は賭けどりで財産をすってしまひ大阪へでる。殺人事件を起し塀の中にいるが、その男が帰ってきたらしいというわさがたつ。

厚司の老人は気の弱い若い鍛冶屋に自分のシャモを買わせ、賭けどりをさせる。シャモは勝ち続け、そのたび若い鍛冶屋は老人に半分をまきあげられる。あとでこの老人は財産をすって大阪へでた叔父であり、巻きあげ金を鍛冶工場資金にしてやろうとしていたことが解る。若い鍛冶屋は目覚めそれを断り自立の道を選ぶ。

郵便局に強盗が入り警察も動き始めるなか、老人は誘いこんだ村のならず者、あばずれ娘をひきつれ、一夜のうちに村を抜け消え、満州へ去る。春になり、仕事に精出し始めた若い鍛冶屋の前の道を、香長平野の田植に雇われていくけなげな娘たちの集団がにぎやかに通りすぎていく。突風のような村のひと騒ぎを小説に仕上げた

浜本浩は、この地を舞台に「土佐のカルメン」もかいた。男と共に謀して夫を殺した女が高飛び寸前につかまるという血の多い女を、「軍鶏」同様あつけらんとかいた。

浜本浩は若いとき「土陽新聞」「高知新聞」記者時代があり土佐ものも多い。いま香北町はアンパンマンミュージアムでにぎわっている。旧道沿いにあつた料亭も、ずい分前に解体になったが、これも「軍鶏」のなかの光景のひとつだつたらう。先日通つたこのあたりには、まだレンゲの田んぼが残つていた。(詩人)



▲ 闘争心旺盛な軍鶏による喧嘩。(写真提供/安田町)
安芸郡安田町には全国的にも珍しい闘鶏のための施設があり、12月から翌年6月にかけて毎週日曜日に闘鶏が開催されている。

資料受贈報告

— 最近の寄贈資料から —
「いつか、ふたりは二匹」

西澤保彦著 講談社刊
二〇〇四年四月 三二二頁



西澤保彦さんは高知県出身の作家で、高知市に在住しながら作家活動を続けています。一九九〇(平成二年)、第一回鮎川哲也賞に応募した「聯殺」が最終候補に残り、招待された授賞式での島田荘司との出会いがきっかけとなり、一九九五年に『解体諸因』でデビューを果たします。以降数々の作品を発表し、SFの設定と本格推理の融合を果たした独自の作品世界で読者を魅了し続けています。今年でデビュー十五周年を迎えるにあたり、それを記念して昨年十一月には当館にて作家デビュー十五周年及び五十冊刊行記念講演会が開催され、多くの来場者が西澤保彦さんの講演に耳を傾けました。そして今回、講演会を縁に西澤保彦さんから

受贈報告(平成二十二年十一月)

平成二十二年二月) 敬称略

- ▼小宮里子「寅彦忌 詠句(色紙)」他一点 ▼西澤保彦「いつか、ふたりは二匹 西澤保彦著 講談社刊」他五十点 ▼山本和代「浜田清次先生講義「古事記」倭健命の物語 山本和代刊」▼高橋紀子「歌集 山姥 高橋紀子著刊」▼萱野笛子「詩集 五丁目電停 雨花 萱野笛子著 ふたは工房刊」▼池田あきこ「ダヤンの絵本づくり 絵本 池田あきこ著 エム・ピー・シー刊」▼食野雅子「マジック・ツリーハウス27 モーツァルトの魔法の笛 メアリー・ポー・オスボーン著 食野雅子訳 メディアファクトリー刊」▼平凡社「寺田寅彦バイオリンを弾く物理学者 未延芳晴著 平凡社刊」▼小松弘愛「詩集のうがええ電車—続・土佐方言の語彙をめぐって— 小松弘愛著 花神社刊」▼山川久三「灯台 山川久三著 土曜美術社出版販売刊」▼楠瀬兵五郎「歌集 風濤 楠瀬兵五郎著 高知アララギ発行所刊」▼横田晴光「坂本龍馬—隠された肖像— 山田一郎著 新潮社刊」他

当館に初期作品から最新作まで、ご自身の著作五十冊が寄贈されました。その中の一冊『いつか、ふたりは二匹』は、二〇〇四年に講談社のミステリーランドレーベルから刊行された作品で、レーベルのコンセプト「かつて子どもだったあなたと少年少女のための…」のとおり、小学生の男の子が主人公の物語。主人公の男の子が猫になつて、犬のピーターとともに、町内で起こつた同じ小学校の女子児童をターゲットにした通り魔事件に立ち向かうという、ミステリーでありつつ冒険物語の要素を持った作品です。
『いつか、ふたりは二匹』他西澤保彦さんから寄贈された著作の数々は文学館常設展のコーナーに展示しています。(学芸課/岡本美和)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

…… 最近開催された催事をご紹介します。……

イ
ベ
ン
ト
紹
介

龍馬ゆかりの文学散歩

2月11日(木・祝)〔2月23日(火)にも同じ内容で開催〕に龍馬ゆかりの文学散歩を行いました。あいにくの空模様の中スタッフを含め24名で出発しました。今回の文学散歩は公共交通機関を利用して、坂崎紫瀾を中心に中江兆民、吉井勇など坂本龍馬との関連性に触れながら、文学館らしい切り口で龍馬を感じていただきました。毎回お楽しみのひとつとなっている昼食は龍馬の時代の再現食「龍馬弁当」。龍馬も同じものを食べたかもしれないとの思いを馳せながらいただきました。そして坂本家の墓所までの移動中、雨が一瞬あがり、まるで私たちを歓迎してくれているようでした。この日はもっと世の中を見たかったであろう龍馬を偲び、今の世の礎をつくった龍馬に感謝しつつ、身の引き締まる雨の文学散歩となりました。(学芸課/門田貴美子)



▲文学散歩の様子

朗読で文学を楽しもう！
今年も朗読フェスティバルを
開催しました！



2月20日(土)に開催された「朗読フェスティバル²⁰¹⁹」には県内各地から12組25名の出演者のみなさんが集まり、多彩な作品をそれぞれが想いを込めて朗読しました。また、フェスティバルの最後には「感動を与える朗読をするために」と題し、特別ゲストとしてお招きした堀井真吾さん(声優・俳優・ナレーター)による朗読と講演会を開催しました。

堀井さんは志賀直哉の短編小説『小僧の神様』を穏やかな優しい声で情感たっぷりに朗読しお客様を魅了したあと、朗読をする際の発声や表現方法について、プロならではの

視点で具体的なアドバイスをください、「このような参加型の朗読イベントは全国的にも珍しい。高知の朗読文化の高さに驚いた。」とコメントをくださいました。

来場者の方からも「堀井先生の講演を聴いて、上手い下手ではない、より自分らしく(作品の世界を)伝えられるようにしっかり学んでゆこうと感じました。」といった感想や「次は朗読する側になってみたい」などのお言葉をいただきました。朗読フェスティバルはみなさんが主役のイベントです。次回もまた、ご期待ください！(学芸課/福富陽子)



▲堀井真吾さんの講演の様子

▼堀井真吾さんの実践的な講演内容を受けて、参加者からは朗読に関する熱心な質問が多く寄せられました。



専門講座へどうぞ！

高知県立文学館では、広く県民の皆様にと士佐文学への興味を深めていただくために、一つのテーマを連続して深く掘り下げる専門講座と、多彩な講師がさまざまなテーマで講演する文学カレッジを開催しています。平成二二年度上半期は専門講座として四回の連続講座を予定しています。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

● 平成22年度(上半期) 専門講座 ●

日程：平成22年5月22日(土)、6月26日(土)、
7月24日(土)、8月28日(土)
時間：各回とも午後2時～3時半まで
場所：高知県立文学館1階ホール
定員：100名

※事前に専用の申込用紙か電話または文学館受付でお申込みください。



平成22年 2月1日(月)～平成23年 1月10日(月)まで、
高知県立文学館と土佐山内家宝物資料館による**連携展示**となります。

企画展
案内

龍馬を描いた文学者たち展

2月1日(月)～3月21日(日) (※会期中 休館日なし)
会場：高知県立文学館 2F 常設展示室特設コーナー
観覧料：400円(常設展含) 午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)



龍馬を描いた文学者たち展の紹介をしています！詳細は4ページをご覧ください。

「大河ドラマの軌跡と文学」展

4月4日(日)～6月27日(日) (※会期中 休館日なし・入館は午後4時半まで)
会場：高知県立文学館2F 常設展示室特設コーナー
観覧料：500円(常設展含)



「龍馬伝」の放送にあわせて、これまで約半世紀近く続いた大河ドラマについてその軌跡とともに原作本や作家にスポットをあて、文学から見た新たな魅力を紐解きます。

■記念講演会「大河ドラマ誕生秘話」元NHKエグゼクティブディレクター・演出家の大原誠氏による講演会です。

日時：平成22年4月18日(日)午後2時～
場所：高知県立文学館1Fホール 講師：大原 誠氏
参加料：要当日観覧券 定員：100名(要電話申込)

「大河ドラマの軌跡と文学」展の紹介をしています！詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

企画展
予告

ピーターラビット日本語版出版40周年記念
ピーターラビット®展(仮)



平成22年 7/9(金)～9/12(日)
場所：常設展示室特設コーナー
観覧料：500円
絵本を通じて「人間と自然と動物との共存」のメッセージを広げていった作者ビアトリクス・ポター™の業績とピーターラビットの魅力ある世界を多彩な資料でご紹介します。

吉井勇没後 50 周年

平成22年 9/23(木・祝)～11/7(日)
場所：常設展示室特設コーナー
観覧料：500円

歌人・吉井勇没後50年にあわせて、勇の耽美で情に満ちた歌風や、その人間味あふれる人物像に迫ります。



松谷みよ子の世界展

平成22年 11/16(火)～平成23年 1/10(月・祝)
場所：常設展示室特設コーナー
観覧料：500円

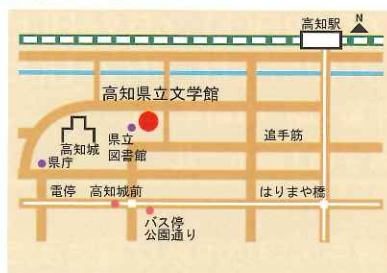
〈モモちゃん〉とアカネちゃんシリーズの作者、松谷みよ子さんが描いてきた豊かな世界を、貴重な資料でお楽しみください。



利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
企画展ごとに異なります。
観覧料 (常設展のみの期間中は350円)
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
駐車場 附属設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(朝倉(高知大学前)行)「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/